

ART KISS LETTER

vol.46

FREE

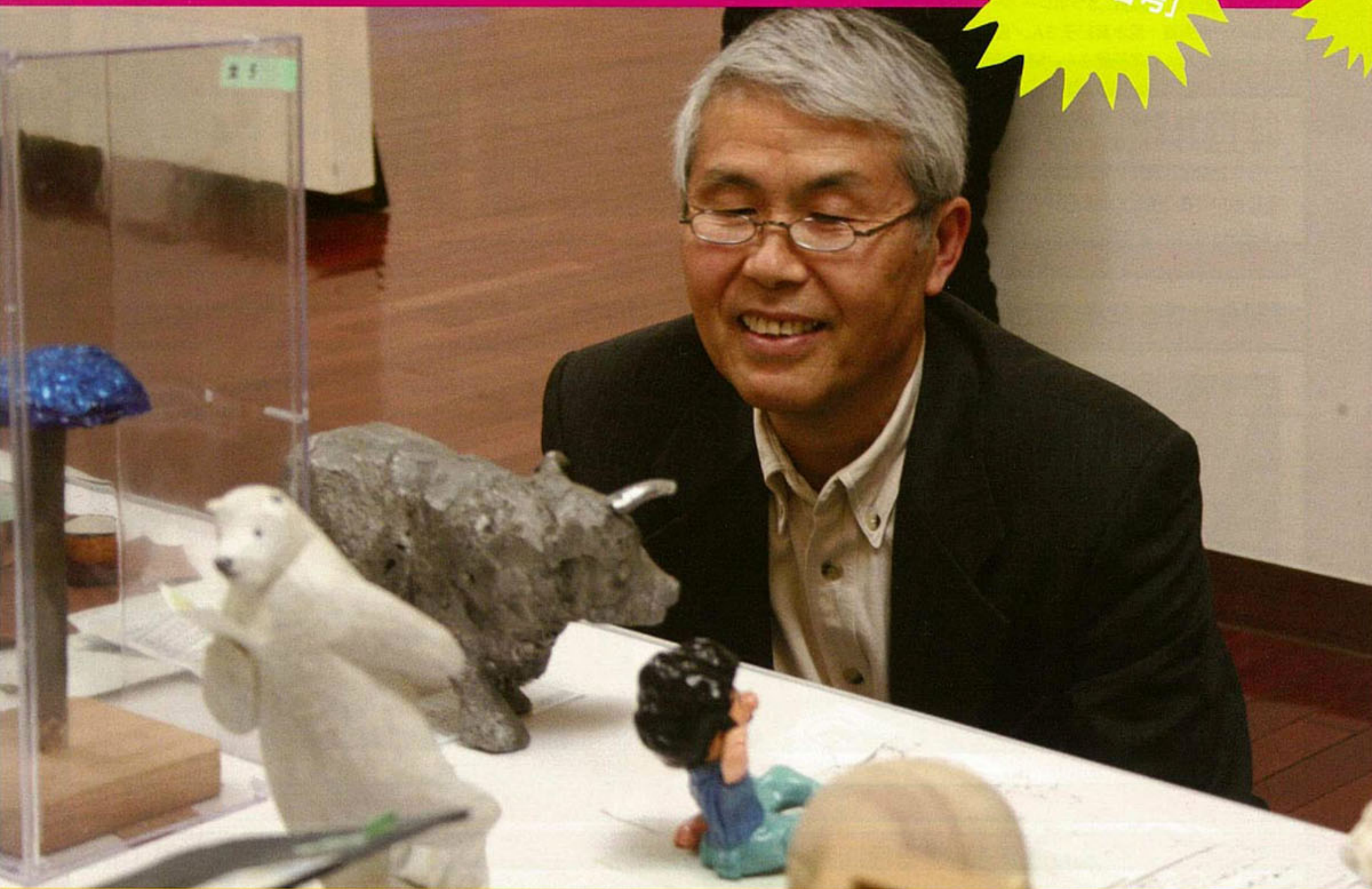
[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

SPRING
[2010.陽春号]



「熊本アートバレード」開催！

第21回熊本市民美術展「熊本アートバレード」が行われました！

本展は、アンデバンダン形式(無審査)のもと、応募いただいた作品全てを美術館の会場で展示する展覧会です。

今回は「まあ、気楽に」というテーマのもと296点の作品が出品されました。

表彰式・開会式では、審査員の野田哲也さんにご出席いただき、ご講評を賜りました。

アートバレード大賞(熊本市賞)は井嶋優里さんの《月の散歩道》、熊本市現代美術館賞は津々木折子さんの《pop》、審査員特別賞(野田哲也賞)は宮部竜二さんの《喜怒哀楽》、井手宣通賞は有富和子の《初冬の山》に決定いたしました。

初日には、熊本アートバレードの開幕を記念して、審査員の野田哲也さんによる講演会を開催しました。熊本出身の野田さんは、版画家として国際的に活躍されるとともに、長年にわたり東京藝術大学で教鞭をとるなど教育的見地からもアートに貢献されてきました。講演会では、熊本アートバレードの審査に携わったご感想、スライドを交えてのご自身の制作について、そして、今日の情報化社会における身体性の脆弱、人間性の回復、芸術の価値にまつわる問題まで、多岐にわたりお話いただく大変刺激的な内容となりました。(A.A)

museum
information

熊本県現代 美術館の活動

第21回熊本市民美術展熊本アートパレード、熊本市中学校造形展 開催 2010.2.27-3.14

今年度のアートパレード大賞、審査員特別賞、熊本市現代美術館賞、井手宣通賞は、今号表紙でご紹介しましたので、優秀賞、奨励賞、コラボレーターの会賞受賞者のみなさまをこちらでご紹介いたします。

シルバー優秀賞：荒木真紀子さん／優秀賞：福島詩織さん、森愼一さん、釘本浩志さん、永田順子さん／シルバー奨励賞：松尾昭雅さん、木村寿昭さん、正木 憲明さん、淵上清さん／奨励賞：谷川優子さん、渡辺満さん、岡松ともきさん、高山法雄さん、荒木宣男さん、秋永尚子さん／コラボレーターの会賞：永田忠孝さん

今年は「熊本アートパレード」展と同時開催で「熊本市中学校造形展」が、ギャラリーで開催されました。来館者のみなさまのアンケートにも、「あわせてみることで楽しかった」という声が寄せられました。



「知られざる日赤の歴史展」関連講演会① 勇知之「日赤誕生秘話」 2010.1.17



郷土史家の勇知之さんによる「日赤誕生秘話」が開催されました。お話は、阪神・淡路大震災、今年1月に起こったハイチの大地震、それから、西南戦争で亡くなられた方々への黙祷から始まりました。西南戦争時にどのような救護活動が行われていたのか、地図などの詳しい史料を交えてのお話で、多くの参加者も大満足の様子でした。(E.Z)



「知られざる日赤の歴史展」関連講演会② 桜井武「日赤コレクションと戦後美術」 2010.1.24

桜井武館長による「知られざる日赤の歴史」展の関連講演会が開催されました。展覧会で紹介されている日本赤十字社の絵画コレクションは、ほとんどが作家本人からの寄贈によるものです。講演では、当時の日本の美術界の状況をはじめ、本社ビルの新築に合わせて場所と題材を熟考し制作した作家の姿や多様な来歴が紹介され、コレクションの歴史的背景が伝えられました。(Y.H)



「熊本市収蔵作品展 CAMK コレクション vol.3 メリー・ゴー・ラウンド」の関連イベントとして、CAMK レクチャーカレッジを開催しました。

財団法人ポーラ美術振興財団の助成を受け、「イタリアおよびバチカン・ミュージアム所蔵の生人形調査」ならびに同時代（19世紀末より20世紀初頭）の日本コレクション調査」というテーマのもと、昨年夏にイタリアのフィレンツェとバチカン市国にて行った調査内容を発表しました。（AKL45号、World News に調査内容抜粋を紹介）

ステイベルト博物館で行った所蔵生人形の内部構造の紹介に続いて、バチカン市国で行われた1925年の伝道万国博覧会の際に出品されたことが、バチカン・ミュージアムの生人形収蔵の由来であることや、日本から出品された物品の内容（なんと木箱数23個！）をリストから紹介しました。今回のバチカン・ミュージアムと当館にとって非常に重要な発見となったのは、万博出品へのマネージメントをしたのが、岩下壯一（洗礼名 Francesco Saverio Iwashita, 1889-1940）であることを確認できたことでした。岩下壯一はハンセン病に関する福祉にも力を注いだ人物で、当館でこの冬に開催する「光の絵画 vol.3 ～祈りの風景～」にも関わってきます。（H.T）



ファミリー&プレマツアー

2010.1.30

今回のファミリー&プレマツアーでは、コレクション展と日赤展と一緒にツアーしました。コレクション展では、ミロヴァン・マルコヴィッチの口紅で描かれた作品や、相撲生人形が皆の心に残ったようです。最後のほうはちょっぴり疲れも出てきましたが、楽しくおしゃべりしながら、ツアーを終えることができました（A.S）

ミュージック・ウェーブNo.028 久田舜一郎 新春コンサート

2010.1.11



2010年の第一回目となるミュージック・ウェーブは、重要無形文化財保持者の久田舜一郎さんをお迎えして、新春コンサートを開催しました。久田さんは、能楽の楽器である小鼓の奏者で、全国各地の能楽堂や文化施設で公演を行っています。コンサートは、実際に小鼓のパーツを組み合わせた「翁」「高砂」の演目を披露してくださったりと大変充実した内容でした。また、会場みなさんも「ヨーツ」「ホツ」のかけ声と手振りでの調子をとるシーンもあり、楽しいコンサートとなりました。（M.O）

CAMKEESボランティア新年会が行われました。

2010.1.14

当館のボランティア CAMKEES の新年会が開催されました。今回の幹事は図書チェックボランティアの皆さんでした。参加人数は45人。普段交流機会の少ない担当以外のスタッフや、違う所属グループのボランティアさんと交流を深める絶好の機会ということで、多くの方がご参加くださいました。円卓を囲む和やかな雰囲気の中で美味しい料理をいただきながら、自己紹介や普段の活動について会話も弾みました。全体で行われた各グループの紹介や抽選会、記念撮影も盛り上がり、一年の始まりにふさわしい笑顔の絶えない新年会となりました。（S.Y）



第5回CAMK「読みがたり」

2010.01.16

今回で5回目を迎えた読みがたり。2010年初のテーマは「にっぼんの行事」でした。梅の花や、鬼、おかめのイラストが飾られた人形劇の舞台の前列には、子どもたちがちょこんと正座してお話しの始まりを待っていてくれました。プログラムの内容は、絵本『おもちゃのきもち』、紙芝居では『せつぶんってなに?』他にもお手玉を使ってのお話し『十二支』など盛りだくさんで行われました。手元にふたつずつ配られたお手玉をぎゅーっと握りしめる可愛い子どもたちの姿も見られました。(C.T)



第74&75回 詩の朗読会

2010.1.28&2010.2.25

第74回、1月の詩の朗読会のテーマは「時間」でした。大分で詩作活動されている方の飛び入り参加1名を含め11名の方が詩作発表をされました。年頭の発表ということで、今年の「時間」の使い方に触れる方、過去をふりかえって「時間」を「ふみつぶしたり」、「ひろいあつめたり」していたことを思われた方、また、「時間」を擬人化したり、「時間」が経過したことを「ただしわが増えただけ」と示された方もいました。西洋美術のイコノグラフィーでは、「時間」は憂鬱な老人が大鎌を持った姿で表されます。今回の発表を聞きながら、ふと近い感じをおぼえました。

第75回、2月の詩の朗読会のテーマは「男と女」でした。11名の方が詩作を発表されました。ほとんどの方が「むずかしいテーマでした…」と前置きされながら、今回のテーマを多様に解釈した作品を発表されていました。男性の発表者は、なぜか「女性」を、謎、不可思議なもの、という視点から抽象的に語るものが多く、女性の発表者は、日常的な空間から、「待つもの」「出て行くもの」「思うもの」「思われるもの」という対比で、男女の関係性を語るものが多かったのが興味深いポイントでした。(H.T)

CAMK人形劇「一寸法師」

2010.2.7

「知られざる日赤の歴史展」&「メリー・ゴー・ラウンド展」関連イベントとして、CAMK人形劇が開催されました。演目は劇団ばれっとの新作「一寸法師」。人形劇が始まる前の演者と人形のコミカルなやり取りですでに子どもたちはヒートアップ! ちょっと長めの人形劇だったにも関わらず、騒ぎ出す子どもたちもおらず、鬼と闘う一寸法師になりきって集中している子どもたちの横顔が印象的でした。(E.Z)



おしらせ

<http://www.camk.or.jp>

祝祭と祈りのテキスタイル

—江戸の幟旗(のぼりばた)から現代のアートへ

CELEBRATORY TEXTILES - from Edo to the present day

2010年4月10日(土)～6月13日(日) 熊本市現代美術館

古代から人間の生活に最も身近であり続けた布は、身体や物を包み、

また祈りや祝祭の旗となって空に翻り、

そして民衆の儀式や生活空間を彩ってきました。

本展はこの布をテーマとして、祝祭性豊かな江戸の幟旗を初め、

熊本ゆかりの大漁旗、平油単(ひらいたん)、ドンザ、定式幕(じょうしきまく)、

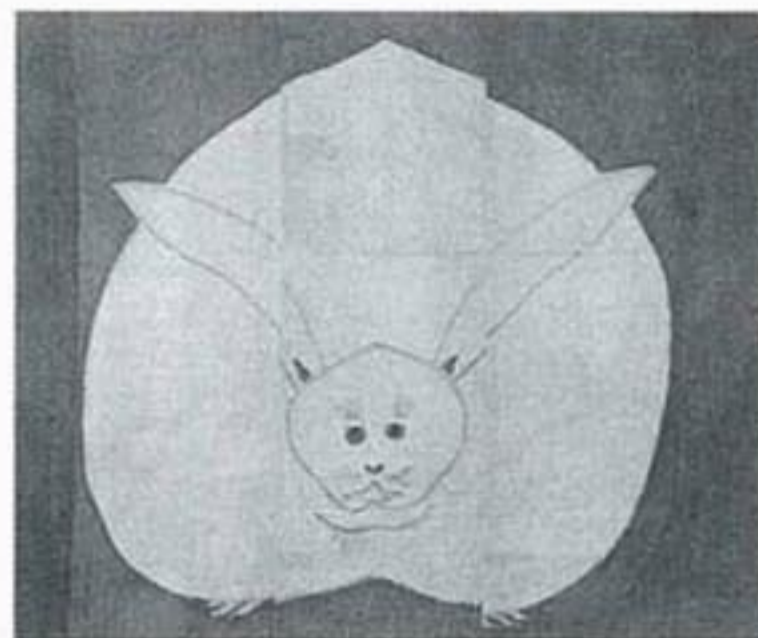
熊本城築城400年祭を記念して市民から寄付された端午の節句の幟、

そして現代日本で布を素材として最も先鋭でダイナミックな表現をする

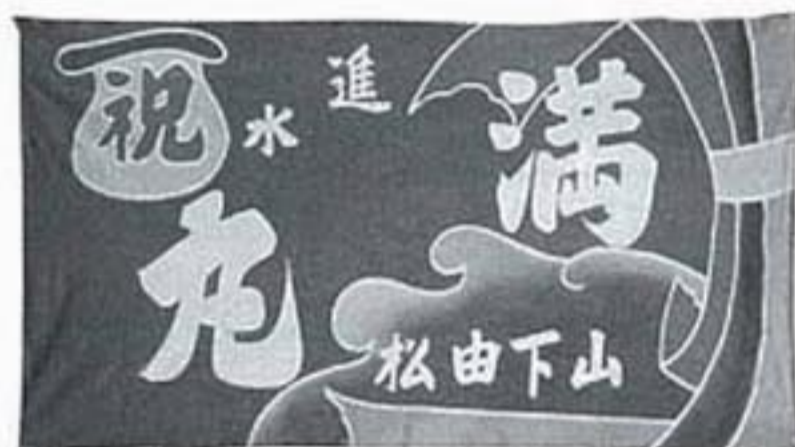
ひびのこづえ、齋藤芽生、手塚愛子らのアーティストの作品により構成される展覧会です。

自然に深く根差し、人間の根源的な思いを布に託した多様な表現の歴史的流れをたどり、

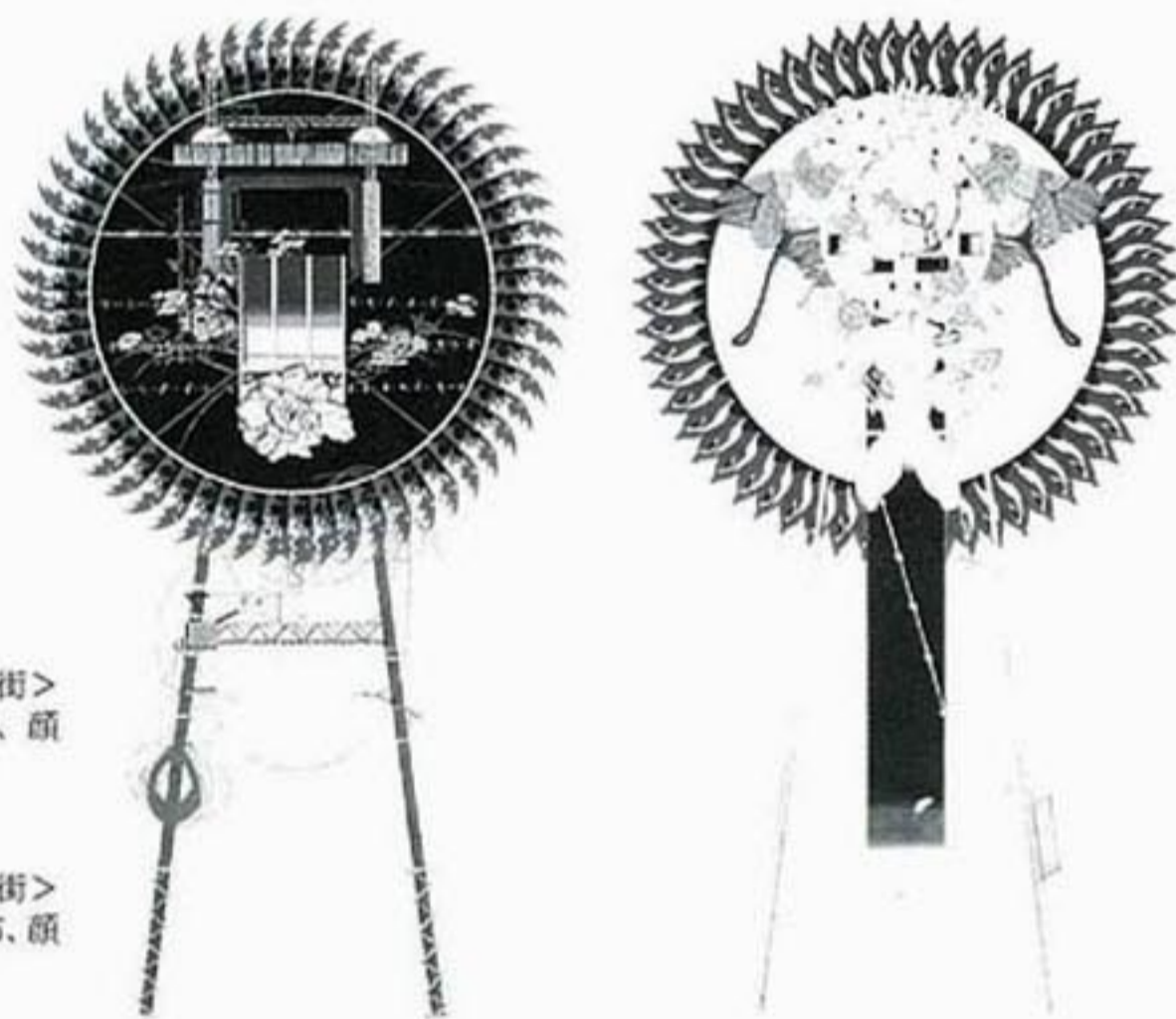
その繋がりの中で現代に息づく先鋭なアートに焦点を当てていくものです。



「兎文様祭礼幕」/江戸時代、北村勝史コレクション



「大漁旗」/天草地方、熊本県文化企画課松橋収蔵庫寄託



左/齋藤芽生<花輪其の六 名前のない街>
《跨線橋》1999 アクリルガッシュ、綿布、顔料、炭酸カルシウム、膠、木製パネル
190.0x100.0cm 個人蔵

右/齋藤芽生<花輪其の六 名前のない街>
《高層住宅》1999 アクリルガッシュ、綿布、顔料、炭酸カルシウム、膠、木製パネル
190.0x100.0cm



ひびのこづえ「はるひ美術館(愛知)でのインスタレーション」/2009年、撮影:城戸保

GIII vol.70 平川なつみーデジャヴな日常

2010年4月1日～5月30日 入場無料

4月1日より、GIII(ギャラリーIII)にて、「平川なつみーデジャヴな日常」展が始まります! 平川さんは、大分県出身の23歳。名古屋芸大を中退後、故郷の大分に戻り、制作を続けています。東京では既に作品の発表を行っている平川さんですが、九州では初の展覧会となり、アクリル画約25点を展示予定です。

平川なつみ公開制作

4月18日(日)11時から 会場:ホームギャラリー



「カーレース」/2009年

アート・ド・キャン 熊本の芸術

熊本弁で「アート・ド・キャン」の意です

第50回 熊日書道展

2009.12.15—12.20 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL:096-351-8411

今年で50回を迎える記念展である。県内で最高、最大の書展でもあるため、書をめざす者の最大関心をもつ書展でもある。497点の応募があり、212点の入賞、入選と、委嘱、無鑑査の71点が展示された。グランプリである熊日賞は藤堂洋子さんのかな「あづさゆみ」という万葉集の和歌2首である。古筆の表現法をうまく使い、墨の濃淡や潤滑、全体の構成も工夫された作で、さすがである。50回記念賞は必由館高校生の中字一席の入賞である。篆書40字を伸びやかで丁寧な筆致で臨書して、ういういしい新鮮さを感じた。県賞は森上象玉さんの「永永無窮」という篆刻である。曲直の線質の変化と切れの良さと調和のうまさが見事。熊本市賞は「夏目漱石の草枕から」という黒田清和さんの近代詩文である。用筆の巧みさと、潤滑をきかせたリズム感のある流れのうまさが見事に生かされた明るい作に見えた。会場は、伸びやかで、力強い漢字や大字作品、流麗な筆運びのかな等多彩で生気に満ちていた。(S.K)



第11回 書芸「風」展

2010.2.17—2.22 アートスペース大宝堂
熊本県熊本市上通町5-6

日展会友の丸山三千代さんが主宰する教室の書道展である。丸山さんの作品は「薄墨桜」等、淡墨を生かした構成が美しい。又四曲屏風に書いた山村善鳥の「風景よりの詩」も継色紙に配置よくまとめて斬新さが見られる。高級な加工された全懐紙に「春夏秋冬」の作も濃墨が冴えを見せていた。来民うちわに全員で自分の言葉を書いた個性豊かな作品や甲骨文字もデザイン風に見せた作品が多く楽しい会場となっていた。(S.K)



板井榮雄 風景画展

2010.1.19—1.25 くまもと阪神・美術画廊
熊本市桜町3番22号

2009年に熊本県芸術功労者賞を受賞した、洋画家板井榮雄さんの展覧会。これまで毒気のある諷刺の効いた人物画がよく見る機会があったが、今回は西ヨーロッパの風景画の小品が並んだ。意外なことに、町や山の風景を描く色彩は確かに板井さんがこれまで人物表現に用いてきた独自の色遣いのままで、それゆえ石造りの町並みの様子もなにやら物語が展開していくような有機的な雰囲気を感じている。「小さい分、世界に入り込むのが難しい」と語るのも印象的だったが、この風景のシリーズは、小品のまま展開していただき、次の作品群が出来上がるのを強く待ち望みたいものである。(H.T)



知香流いけばな展

2010.2.12—15 鶴屋東館8階ふれあいギャラリー
熊本市手取本町6番1号

知香流熊本支部創立55周年記念「知香流いけばな展～暮らしを楽しむ～」が開催。「花と物との出会いの中に心の通う調和美を知る」という創始者の教えを日々実践されている先生方の作品が、「暮らしを楽しむ」というテーマで展示されていた。年中行事にまつわる「物」と「花」とをうまく組み合わせ合わせて1年を表現しており、繊細さと女性ならではのあたたかみが会場全体を包み、ひと足早い春の陽だまりのようないけばな展となっていた。(E.Z)



～新しい風～ 山下孝治日本画展

2010.1.27—2.2 鶴屋百貨店 美術ギャラリー 熊本市手取本町6番1号

熊本出身の日本画家山下孝治さんの個展。風景や花鳥を中心に新作が並ぶ。鮮やかで清澄な青や赤の色彩が目目をひく山下さんらしい作品も多く展示されていた。画面の大部分を美しい青や赤が占め、そのなか細やかな筆致で繊細に描写された草花風物が情感を添えていた。また、会場の中央に配された阿蘇を描いた作品は、他の作品とは趣が異なる抑えた色彩ながら堂々とした存在感を示していた。郷里熊本での初個展ということもあり熊本の風景に挑戦したとのこと。今後の展開がとても楽しみである。(M.F)

ニャンニャン ネコ・フェスティバル展

2010.2.20—2.28 画廊喫茶三点鐘 熊本市手取本町3-8 有明ビル3F

今年は平成22年2月22日と「2」が並ぶ年。そして三点鐘も22周年を迎えるという、この特別な日を記念して、三点鐘のゴロゴロ合わせの企画展示会「ニャンニャン ネコ・フェスティバル展」が開催された。作家はプロ、アマ問わず。オーナーの「こういう企画します」の声に集まったネコ好きの方々による、愛情いっぱい作品群が並ぶ。もちろんモチーフはネコ。26人の作り手が愛情いっぱいに仕上げた作品は、どれも全く違う表情をのぞかせる。素材も多種多様で、絵画をはじめ、陶芸、七宝焼、ガラス細工、ポストカード、ニットなどさまざまなジャンルが賑やかに会場を沸かせていた。また、BGMも昭和期の童謡歌手である伴久美子さんの「ねこふんじゃった」の懐かしいメロディが心地よく響いていた。なんでも、訪れたネコ好きのお客様が、後日編集して持ってきてくださったとか。展示を見に来られたお客さんもみなさん「ネコ好きにはたまらない!」といった雰囲気だ。たくさんの人によってつくられた、とても愛らしいニャンニャンフェスティバルであった。来年も楽しみである。(C.T)



Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ

アンケートに寄せられた感想
(抜粋)を紹介いたします。

知られざる日赤の歴史展

- 小磯良平、東郷青児などとても珍しいコレクション展で大変よかったです。日赤が熊本から誕生したという事を初めて知る事ができ、又PRすべきだと思いました。(熊本市内、50代、女性)
- ディズニーと日赤がコラボしているのが素晴らしいかったです。(熊本市内、20代、女性)

メリー・ゴラウンド展

- 草間彌生の作品は、照明の当て方でもっと違う作品にも見えるのでは。(熊本市内、20代、女性)
- 中島千波「一心行の桜」と千住博の絵画が深く印象的でした。以前もここで拝見したと思うのですが、さらにもっと感動が伝わってきました。(熊本市内、30代、女性)

熊本アートパレード

- たくさん展示があつて楽しかったです。最後に中学生の作品を観てなつかしかったし今の時代の子もこんなふうに表示できるんだなって思つてうれしかったです。あつたかい作品が多くて、地元だし、心がほつとなりました。(熊本市内、20代、女性)
- 熊本市の中学生の造形展(私たちの頃から考えると、はるかに心模様が広い!)、アートパレードの作品(いつまでもこの空間の中で呼吸していきたい!)、言う事なし!(熊本市内、50代、男性)
- 風景とかテーマごとに区別してあつたのでよかつた。(熊本市内、60代、女性)

(編集者注記:熊本アートパレードと同時会期で、熊本市中学校造形展が開催されておりました)

編集後記

春は移動の季節です。ということでいくつかの壮行会を行いました。お別れはさみしいのですが、なにより親しい面々と会話を楽しめる、とても素敵な会でした。ベランダでは、沈丁花が盛りとばかりに花を香らせる一方、スマイレの花が咲き誇り、シャクヤクはサンゴのような赤い芽を伸ばし、テッセンも若い芽をのぞかせ始めました。冬の厳しい準備期間を終えて、その成果をみせつける力強い美しさが、オリンピック選手の笑顔と重なります。

編集長 富澤治子

アートパレード展では市民の皆さんからたくさんのご出品をいただきました。熊本で制作を続けながら、展示会にも出品しようとチャレンジする気持ちが素敵なことだと思います。そして、様々な作品が一堂に集まるパレードのようなにぎやかな空間。賞の審査も、毎年変わるテーマや審査員によって大きく変わるのが魅力です。新鮮な驚きをたくさん秘めたこの展示会。来年もぜひチャレンジしてくださいね!

担当 大岩みゆき

- 発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.46 2010年3月発行(陽春号) ◎無料◎
- 発行人/桜井 武 編集長/富澤 治子 担当/大岩 みゆき
- デザイン/(有)松永 社デザイン事務所 ●印刷/シモダ印刷
- 発行/熊本市現代美術館 〒860-0845熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧
*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
蔵座江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)
坂本顕子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩葵
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
矢加部咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
高橋知江
Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

*AKL45号のArt de Gyanにおきまして、「熊大創立60周年 教育学部同窓会創立135年記念書道展」と「独立書人第13回熊本支部展」の写真が誤って入れ替わって掲載されておりました。ここに記し訂正し、深くお詫び申し上げます。

WORLD NEWS

はじめてのフィレンツェ旅行記

イタリアのトスカーナ州の州都フィレンツェ。かつて、ルネサンス文化が花開き、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロなど多くの著名人が活躍した。現在でも芸術遺産が残り、街全体が世界文化遺産に登録されていること等で知られる、観光客のたえない都市である。

まだ正月気分がほのかに残る 1 月中旬。一週間の休暇を利用し、念願のイタリア、フィレンツェへ向かった。熊本から飛行機を 3 回乗り継ぎ、まる 1 日を経てようやくフィレンツェの地を踏む。出迎えてくれたのは、スーツ姿のスキンヘッド強面のイタリア人ドライバーだが、見た目よりも声が高くとても優しい。来て早々このイタリアらしいおおらかさとおかしみに触れ、なんだか楽しくなってくる。宿泊先は、シニョリーア広場に面しており、この広場にはあの大変有名なミケランジェロのダヴィデ像（こちらはレプリカで本物はアカデミア美術館にある）がある。寒空に力強く立つダヴィデやヘラクレスを初めて見たときは新鮮で興奮したが、毎日のように眺めていると、時々、旅先で浮かれた私を戒めてもくれる、愛すべき身近な存在に思えてくる。

ホテルは、もともと修道院であったのを改装して作られたのだそうだ。客室はアンティークの家具に、刺繍が施されたリネンのカーテン。伝統工芸のフィレンツェ紙を使った利用案内や絵画の額縁など、フィレンツェらしいしつらえも嬉しい。

さて、到着した翌日は、見事な快晴であった。オプションで申し込んだ半日市内観光で、街の中心部（チェントロ）を巡る。ドゥオモ（写真①）、シニョリーア広場、ウフィッツィ美術館とその外壁に立ち並ぶダ・ヴィンチやミケランジェロ、ダンテなど錚々たる有名人の石像。宝飾細工に見惚れるヴェッキオ橋に、アルノ川沿いの散歩道。ヴェッキオ宮の入口付近には、ミケランジェロが友人との会話中にこっそり彫ったといわれる、横顔（写真②）などいろんな発見が楽しい。半日だけでも見ごたえ十分なのに、これでもまだほんの一部である。フィレンツェの街はみるべきものが本当に

多い。

解散後、ドゥオモのクーボラ（展望所）に上る。およそ 500 段の階段（エレベーターはもちろん無い）を、世界各地からの観光客と一緒に息を切らしながら昇った。閉所 & 高所恐怖症の私は足がすくんだが、それでもクーボラから眺めるこの日のフィレンツェは、見渡すかぎりの青空と、レンガ屋根の鮮烈なコントラストが印象的で、忘れられない素晴らしい景色であった。フィレンツェに来たという実感も湧いてくる。

3 日目からは、美術館巡りを中心に観光する。1 月のフィレンツェは閑散期で、どこの美術館も割と空いているようだ。ウフィッツィ、アカデミア、パラティーナ、フィレンツェの三大美術館も並ばずに入場でき、ゆっくりと鑑賞できる。ウフィッツィ美術館では、ローマ時代からの膨大な美術品がコレクションされている。ポッティチェッリの「春」など有名な作品も多くあるけれど、わたしはカラヴァッジョの作品に見惚れる。代表作「パッカス」は、生気のない気だるそうにしている美少年が、ワイングラスをもっている絵だ。本物を見ていると誘われるようにほろりと心地よくなるのだが…なんとなく危うい雰囲気も持ち合わせている。絵の中の脇役である熟した果実たちも何かを暗示しているかのようだ。ドラマティックな明暗の効果や肌の質感も惹きつけられる理由のひとつ。アカデミア美術館で、ミケランジェロの 4 体の奴隷像と、本物のダヴィデ像をじっくりと堪能した後カヴール通りを歩いていると、見覚えのある写真が目にとまる。なんと、当館で 2008 年に開催した、「メモリアーまなざしの軌跡」展出品作家のカンティダ・ヘーファー氏の個展が催されていたのである。（写真③）フィレンツェをテーマに、無人のウフィッツィ美術館や劇場、図書館など、写真作品が数点展示されており、会場も見ごたえある構成となっていた。

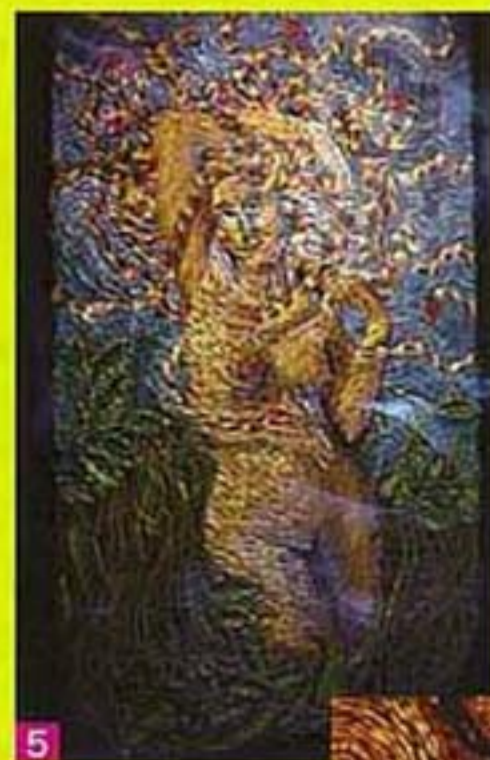
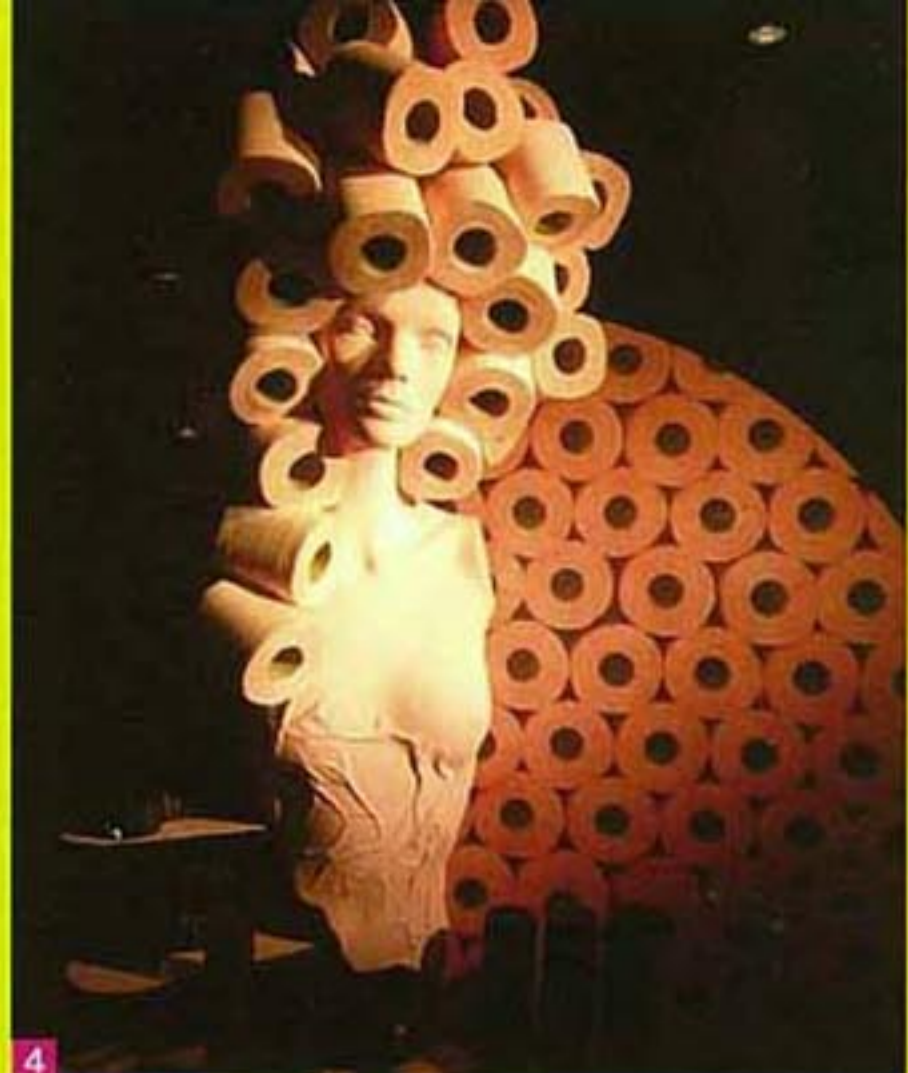
他にも街を歩いているといろいろなアートとの出会いがある。例えば、写真④の街中でみつけた美容学校のウィンドウ・ディスプレイ。トイレット

ペーパーの使い方がなんとユニーク。写真⑤は、一見絵画のようにみえるが、実は全て色鉛筆そのものを密集させて作ってある。写真⑥は、捨て子養育院美術館前の何かの催しの宣伝と思われるが、世界中の今を生きる人たちの写真である。およそ 600 年前の建物と相反していて新鮮に映る。現代アートを扱うギャラリーも街中に点々とある。フィレンツェは景観規制があるので新しいビルが立つことはないが、内なる所で現代的な試みが多くなされているようだ。こちらは大変興味深い。

それから、職人の手仕事を感じられる店舗も多くある。革製品や紙やジュエリー、陶磁器、ファッションも然り。革製品はハンドメイドのモカシンを一つ持っているが、長年はいても飽きのこない、宝物のような履物である。街を歩きながら、そんな手仕事をたくさんみていると、何世紀も前に人々が一つ一つ石を積み街を造り上げてゆく様とオーバーラップして感慨深くなる。私自身も自分の手で石を積み上げていくようなひたむきな心を大切にしていこうと心に刻む。

1 週間の滞在を通して、ほんの少しであるが、フィレンツェの街を肌で感じた充実した旅となった。作品の質と量に圧倒され、閑散期とはいえ人の多さに圧倒された。そこで見た世界中の人々の顔、しぐさ、言葉。なんだか自分とあまり変わらないような気もした。下町ではイタリア語の飛び交う地元の人たちの人情味あふれる光景も心に残る。それに日本では味わったことのないオリーブオイルやハーブをふんだんに使ったおいしい料理やジェラードは自分に幸せをもたらす食べ物であることを知った。ピッティ庭園からの田舎の眺めや、ミケランジェロ広場から一望した夕暮れの風景は（写真⑦）は私の心を少し広げてくれたような気がした。

余韻を十分に残してこの短い旅は終わった。長い階段の先にあるクーボラからの美しい眺めを思い出しながら、今は、また出発点に立つような清々しい気持ちである。（M.O）



- ①サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂（ドゥオモ）
- ②ミケランジェロの落書き
- ③「カンティダ・ヘーファー フィレンツェ」展の様子
- ④美容学校のショー・ウィンドウ
- ⑤色鉛筆なショー・ウィンドウ
- ⑥捨て子養育院美術館前
- ⑦ミケランジェロ広場からの夕時の眺め

